聖心新聞

令和３年（2021）日刊28020号

2|1［月］

完全中高一貫６年制教育
聖心学園中等教育学校

〒634－0063　奈良県橿原市久米町222番地
TEL：0744－27－3370

１年Ｂグループ作成

産経新聞編集企画室の協力を得て制作しています。

飛鳥 豊かな自然の恵み

明日香村に広がる棚田

歴史的な遺構と並び、その自然も魅力の一つである飛鳥。しかし「自然の恵み」として得られている農産物などは、全国的には知られていないものも少なくない。そこで、聖心学園中等教育学校（奈良県橿原市）で学んでいる私たちが同県明日香村の自然を調べてみた。

糖度高いイチゴ あすかルビー
古代米など育む 棚田

「日本の棚田百選」や、国の重要文化的景観に指定されている飛鳥の棚田。棚田とは、山の斜面などの傾斜地に階段状に作られた水田のこと。飛鳥の棚田に水をもたらす人工の川は、約千年前に「提灯測量（ようかんちょうりょう）」と呼ばれる技法で作られた。

こうした棚田で作られた飛鳥の米で、有名なのは古代米だ。古代米とは、稲の原種の特徴を受け継いでいる米のことを指す。主に赤米、黒米、緑米があり、生命力が強く、病気を抑制する効果があるとされる。また日本酒や米粉をはじめ、さまざまなものに使われている。

棚田で稲作をしている人たちは、最近、ウンカという害虫に悩まされている。ウンカは中国から季節風に乗ってやってきたもので、収穫する前の米を食べてしまう。

飛鳥の名がついたイチゴ「あすかルビー」は、普通のイチゴよりも糖度が高く、人気を集めている。奈良県農業試験場が、「アスカウェイブ」と「女峰」を交配して作り出した特産品で、平成12（２０００）年に品種登録された。丸みのある円錐形で粒は大きく、ツヤのある果皮は赤色に染まり、高い糖度とともに、程よい酸味を持つ。

飛鳥で作られる自然の恵みを購入することができるのが「あすか夢販売所」（明日香村御園）だ。村内の農家がつくった農産物を中心に販売している。

あすかルビーをはじめ、冬が旬の葉野菜「タアサイ」や、生のままでも食べられる赤カブ「ももの すけ」などが今は販売されている。ぜひ、ここに立ち寄ってみてはどうだろうか。

人口 25年で５分の４に減少
「明日香村らしさ」ＰＲを

人口減少や高齢者の進行が問題となっている明日香村

奈良県明日香村について調べた聖心学園中等教育学校の生徒らが、人口減少の状況についてまとめた。明日香村は、周辺の自治体と比較しても人口の減少率が高く、高齢化が進んでいることが分かった。

明日香村の人口は５４９２人（昨年11月）。国土交通省の資料によると、平成２年から27年までの25年間で５分の４に減少した。その原因は、主に高齢者の人口が増加し、若い世代の人々が減少しているからだ。

さらにわかりやすくいうと、産まれてくる赤ちゃんの数が、亡くなる人の数よりも少ない、ということになる。

一方で、高齢者の割合は増加。昭和55年から平成27年までの35年の間に、65歳以上の住民は約２・２倍の２０１９人に増えた。高齢者が住民全員に占める割合も36・６％、つまり村民の３人に一人は高齢者、という状況だ。

逆に、次代を担う14歳以下の住民は５２４人しかおらず、昭和55年の約40％にまで減っている。

人口減少と少子高齢化は明日香村に限ったことではない。奈良県全体の人口も、平成17年をピークに減り続けている。人口減少・少子高齢化は今後も進んでいくと予測されており、高齢者が増えることによる社会保障費の増加と、人口減少によって税金など県の歳入が大きく減少する恐れがある。

明日香村の人口減少率は、奈良県全体の減少率や、近隣自治体の減少率と比べても極めて高い。平成17年から27年までの10年間をみると、明日香村の減少率はマイナス12・８％。奈良県全体ではマイナス４％、高取町（マイナス９・１％）や大淀町（マイナス10％）より目立っており、29年４月には「過疎地域」に指定された。

明日香村の現状を調べてみて、村にしかない魅力をアピールするため、歴史を展示する場所を見直してみることや、「明日香村らしさ」をもっと前面に押し出すなど、明日香村の歴史や自然を生かす所を作る取り組みを、探す必要があると思った。

「冠位十二階」「十七条の憲法」
聖徳太子の生涯と偉業

聖徳太子が建立した法隆寺の五重塔（奈良県斑鳩町）

「『飛鳥』と聞いて、最初に思いつくものは？」―。聖心学園中等教育学校１年生の私たちが調べた結果、思いつくのは「歴史」だという結論にたどりついた。その中でも、特に有名な聖徳太子について調べた。

５９３年、推古天皇から政治を任された聖徳太子は約10年間、国内の政治を取り仕切り、活躍した。

その時に整備した代表的な制度は、「冠位十二階」と「十七条の憲法」がある。冠位十二階は、家柄ではなく、個人の功績によって地位を決める制度で、これにより、能力の高い者が上の地位に立つことができるようになった。

十七条の憲法は、国の中心が天皇であること、仏教をうやまうことなど役人の道徳を説いたもので、これにより、具体的な政府の形が定まった。

聖徳太子が建立した寺院としては、世界最古の木造建築でもある法隆寺（奈良県斑鳩町）があげられる。太子の父である用明天皇が、自らの病気が治るよう祈って建立しようとしたが、崩御されたため、遺志を継いだ推古天皇と聖徳太子が、６０７年に完成させたという。

日本書紀によると、６７０年に焼失したとされ、その後は現在の場所に再建されたと考えられている。

そもそも、聖徳太子という名前は、尊称かあるいは諡号（しごう）（亡くなった後に贈られる名前）であり、「厩戸皇子（うまやどのおうじ）」などさまざまな名前がある。用明天皇の第二皇子で、母は欽明天皇の皇女・穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）。

聖徳太子がいた斑鳩の里では、その当時天然痘が流行し、聖徳太子も６２２年に亡くなった。皇族の間でも感染が広まっており、病気になったという文書が残っている。

橿原市 住むにより

「都会すぎず、田舎すぎない」

聖心学園中等教育学校の生徒３人が、１月13日、橿原市の魅力や課題についてまとめた。近鉄大和八木駅やコミュニティーバスなど交通の便もよく、市の中心には新線道路や国道などの大きな自動車道が通っており、「都会すぎず、田舎すぎない。人口も多すぎず、少なすぎない。生活しやすい街」という印象を持つことができた。

電車やバスなど交通網のメリットを調べると、八木駅から頻繁に大型ショッピングセンターへのバスがでていて、買い物に行きやすいところがあげられる。八木駅からは京都や大阪、名古屋、神戸へ行くのも便利。特急も停車する。国道と幹線道路が市の中央を南北に交差しているため、車での移動も便利だ。

橿原市で最も人気のあるショッピングモール、イオンモール橿原

一方、幹線道路や大きな国道が通っているので車やバイクの騒音が気になるところや、道幅が狭く車のすぐ横を通らなければならない道路がまだ残っているところが、デメリットとしてあげられる。

橿原市で最も人気のあるショッピングモール、イオンモール橿原（アルル）をはじめ、買い物をするには便利。同店のホームページによると、ベビーカーのまま入れるトイレを設置したり、移動がスムーズにできるよう、店内の段差をなくすバリアフリー化に努めるなど子育てのお母さんを応援する活動を進めている。ただし、休日は混雑している。

ほかの地域から橿原市に移住することを考えたとき、交通の便や公共の施設、いろいろな店もあり、不便を感じるところはないといえる。一方で、住宅地の中には道が狭い所もあり、海はもとより、遊ぶことができるような川もない。遊ぶところも減っているところが課題としてはあげられる。

江戸時代の面影を現在に残る「今西家住宅」の庭

江戸時代の面影 今も

橿原・今井町 観光スポット
子供や住民楽しめる施設も充実

聖心学園中等教育学校１年の生徒が、学校の所在地でもある橿原市の魅力を調べた。住む人が過ごしやすい施設、子供が喜ぶ施設、歴史的な面影を残す施設をそれぞれ紹介していきたい。

まずは、甲子園球場（３・85㌶）が13個も入るほど、50㌶の広さをほこる橿原運動公園（橿原市雲梯町）。犬を散歩させている人、スポーツをする人、休日には家族で遊びに来ている人も多い。野球場やサッカー場、テニスコート、ソフトボール場まであり、多くの人から親しみを持たれ、利用されている。

子供たちが喜びそうなのが橿原市昆虫館（同市南山町）だ。オオゴマダラなど約10種類、５００頭以上のチョウが飛び交う「放蝶温室」や１０００点を超える昆虫の標本があり、幼児から小学生、中学生、高校生、大学生まで、多くの人が来館する。昆虫のいいところは、生活する環境を持っていて食べるえさも決まっているところだそうだ。

江戸時代の面影を今に伝えている同市今井町の街並みは、観光スポットとして人気を集めている。江戸時代前期に建てられ、現在は国の重要文化財に指定されている「今西家住宅」にはお白洲やいぶし牢跡があり、もともとこの住宅に住んでいた一族が、治安や行政に大きな力を持っていたことがわかる。ほかに、金具商を営んでいた「旧米谷家住宅」などもある。

橿原市の交通の中心となっているのは、近鉄大和八木駅。たくさんの電車がとまり、ショッピングモールやコンビニエンスストア、駐車場などもある。ただし、駅から移動する場合には車が必要なところが多く、課題もあることがわかった。